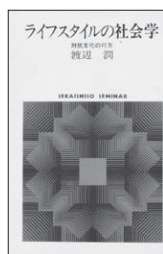


ライフスタイルの社会学——対抗文化の行方

(世界思想社 1982 年)



佐藤生実

2003 年から修士／博士課程、そして大学院の枠を飛び越えて 10 年以上渡辺先生のもとで学びながら、1982 年に刊行された先生のデビュー作『ライフスタイルの社会学』をきちんと読んだのは、ごく最近のことだった。5、6 年前になるだろうか、ファッションを中心とした小売業界で「ライフスタイル」がキーワードとして語られるようになった頃だ。小売業界に半分足を突っ込んでいる私は、「ライフスタイル」という言葉が一人歩きし、その結果、単に衣食住が揃う「トータルに消費ができる店」としての「ライフスタイルショップ」が乱立している状況に、もやもやとした気持ちを抱いていた。

もちろん、言葉が持っていた意味や意図を抜き取って使用することは、マーケティングの常である。衣料品の売上が年々落ち込むなか、アパレル企業が取った戦略なのだ、と一蹴することもできただろう。けれど折しも日本では、3.11 に端を発する原発問題、差別・ヘイトスピーチ、食の安全、ブラック企業……といったさまざまな社会問題が、次々と表面化、暴露され、「当たり前」だと思われていた生活基盤が揺らいでいた頃。それぞれの「暮らし方、生き方」が改めて問われるなか、小売業というモ

ノを提供する立場だからこそ、「ライフスタイル」というコンセプトを矮小化してはいけなと感じ、本書のページをめくったのだった。

副題にあるように、「ライフスタイル」は 1960 年代のアメリカを中心とした対抗文化と密接な関係にある。というよりも「対抗文化は、新しい『ライフスタイル』を求めた運動」だった。既存の価値観や生き方を問い、拒絶し、反抗すること、そのうえで自身が選択する新しい生き方が、「ライフスタイル」である。

渡辺先生は、そんな「ライフスタイル」の実践者だった。徹底して「当たり前」な価値観に疑問を呈し、世間のことなんかどこ吹く風の、天邪鬼な仙人。学内でノーネクタイにジーパンで過ごし、インスタントでない珈琲を味わいながらゼミを行うといった、何気ない日常の積み重ねからも、そのスタイルは私たちに示されていた。

大学から離れ、河口湖にある渡辺先生の自宅に行き、まさに渡辺先生の「ライフスタイル」に触れさせていただく機会もたくさんいただいた。冬の生活に備えて薪を割り、珈琲を飲み、森の空気を吸いながら外で食事をする。渡辺先生手作りのシシャモの燻製が登場したこと

もあつたし、先生が蕎麦粉でガレットを焼き、私の中身の具材を作ったこともあつた。そしてそれらの料理は先生のパートナー和枝さんが作ったお皿に並べられ、渡辺先生が彫った木のカトラリーを使って食べる。よく寝た次の日は、半ば強制的にカヤックやサイクリングに挑戦させられたり。湖畔からよく見える富士山を眺めていたら、「みんな同じ場所で、絵葉書みたいな写真撮るんだよなあ」とつぶやいていたのを思い出す。

そんな「ライフスタイル」を、理想の生活としてただただ憧れられることを渡辺先生は嫌っていた。結局そういう人びとは、「でも」と切り出し、「そういう暮らしができる職業だから」「余裕があるから」と、何やかんやと出来ない言い訳をする。それはまるで、ライフスタイルショップに行けば「ライフスタイル」が得られると考えているようなもので、自分自身で「暮らし」を選択し、作っていくということではない。

そのように教わった私も、私なりの「ライフスタイル」を実践しているつもりだったけれど、どこか後ろめたさも感じていた。大量生産／大量消費を批判しながら、企業のなかで「いかにモノを売るか」を考える仕事をしていること。理念に賛同しない企業とも付き合い、ときには権威的な男の上司にだってビールを注ぐ。一方で、「先生」と呼ばれる機会も増えて、それらしい振る舞いも知らず知らずのうちに身についていく。

そのような思いを抱いている私にとって、渡辺先生が30歳前後の時期に書かれた本書は、また違った角度から「ライフスタイル」を形成していくことの手ざわりを感じさせてくれた。

出会った時にはすでに、渡辺先生は「ライフスタイル」の仙人だったけれど、現在の私の年齢と近い時期に言葉を紡ぐ渡辺潤は、「いったん社会へ出て、『しごと』を持った時、人はどこまで政治的になりえるか。自分の『しごと』や『暮らし』と結びついた思想を持てるか」を考えていく過程のなかで、たくさんの戸惑いや不安を抱いていた。その揺らぎや葛藤が、今の私にはダイレクトに伝わってきて、読んでいてなんともいえず悶絶する部分もあつたけれど、同時にまた、30年以上の時を超えて当時の渡辺先生に励まされた気分にもなつた。

特に、企業の組織のなかに片足突っ込んでいる私には、「ある組織に囚われていても常に揺れ動いていて、ある時には飛び出す危険、可能性」という一文が響き、同時にまた、正社員にもならず遊ぶように仕事をしている私に「おい佐藤さん、そんなんじゃクビになるんじゃないか？」と面白そうに何度も言ってくる、渡辺先生の姿も思い出されたのだった（半分本気で心配していたのかもしれないが…）。

不勉強で怠惰だった私は、真面目な研究者になれなかつたけれど、一番重要な、「ライフスタイルとは自ら新しい生き方を選択すること」、「日常をデザインすること」を学ばせてもらった気がする。思えば大学院入試の面接で、渡辺先生から「あなたが考えたいという『政治』とはなんですか」と聞かれたとき、私はおっかなびっくりしながらも「日常生活にふりかかる抑圧です」と答えた。つまりそれは「ライフスタイル」のことだったのであろう、と今ではわかる。もちろん渡辺先生はそんなこと覚えていないと思うけれど。